

海外の話題

ロンドンだより

農林中央金庫 ロンドン支店長 高 島 浩

ロンドンにもようやく春が来た。ハイドパーク等の公園の芝生の間から水仙が黄色い花を咲かせている。これから4月、5月に向けて日照時間も伸び、明るく穏やかな季節を迎える。振り返って見ると、今年の冬はとても暗いものだった。

昨年8月の北京オリンピックの閉会式において、ロンドン市長のボリス・ジョンソン氏が中国から五輪旗を受け取った。ロンドンのトラファルガー広場でもお祭り騒ぎが繰り広げられた。今回のオリンピックにおいては英国選手が予想以上の活躍をし、4年後のロンドン・オリンピックでの英国選手の活躍を期待する記事とともに、オリンピックが一昨年以来低迷基調となっていた英国の経済を再浮上させるきっかけとなるのではという報道が多くなっていた。

ところが、こうした明るいニュースは続かず、9月に入りリーマンの破綻が伝えられるころには、日照時間の減少とともに、暗いニュースが多くなった。

ご存知のとおり、ロンドンの冬はとても暗い。日照時間が長く、さわやかな気候が続く春から夏にかけてと異なり、冬にむけて、一日一日と日暮れが早くなり、冬至のころは、朝は8時過ぎに夜が明け、夕方3時半には日没を迎える。

この日照時間の減少にあわせるように、経済指標は悪い値を示し、10月の政府による大手金融機関への資本注入や11月以降のイングランド銀行により相次ぐ政策金利の大幅利下げにもかかわらず、金融、経済環境は一向に改善の兆しを見せていない。国民のムードもおのずと暗いものとなってしまった。

今年に入っても、暗いニュースが続いている。英国の経済が、先進国の中でも相当に悪いのではないかとの憶測からポンド安が進行し、ほぼ1ポンドが1ユーロとなるころまでポンド安が進んだ。英国のユーロ通貨圏入りに関する賛否が国内のみならず、欧州においても聞かれるようになった。このことは英国国民の自尊心を大きく傷つけることとなったのではないだろうか。

また、小売業においても、ウエッジウッドや紅茶のウィッタードなどの名だたる老舗が倒産し、毎日、新聞を見るのが怖くなるくらい厳しいものとなった。(8月に中国で五輪旗を受け取ったジョ

ンソン市長は、「英国の経済紙はホラー小説」のようだと揶揄していた)

さらに、2月になると、実に18年振りの大雪に見舞われ、ロンドン市内のバスは全面運休となり、経済のみならず気候からも見放されたのかと誰しも思ったのではないか。3月に入り、日照時間も伸び気分的に安らいできたせいかどうかはわからないが、イングランド銀行の実質的なゼロ金利政策や量的緩和の実施があり、それを好感する声も聞かれるようになってきた。しかし、銀行の不良債権問題は解決しておらず、英国の大手2銀行が事実上国有化されることとなるなど、季節は春を迎えている一方で、経済環境にはなかなか明るい兆しを見出すことが難しい。

歴史的に見れば、ロンドンはいくつかの波を越えながら、現在の金融都市としての地位を獲得している。この冬はとても暗かったが、必ずや英国の経済や金融都市としてのシティは蘇るであろう。毎日のニュースに一喜一憂せずに、アフターファイブをロンドン名物のパブで過ごすのも妙案かと思うが、そのパブも1日5件が廃業している。

このように暗い話が多い中、英国の数少ない輸出産業である自転車業界は好調である。ロンドンと言うと通勤は地下鉄をイメージするが、くだんのロンドン市長も自転車通勤しているなど、ロンドン市内を自転車通勤する人が増えてきている。また、ロンドンの大きな公園にはサイクリング用のトラックが用意されているところもあり、さまざまな花が咲き乱れた公園をサイクリングするのは気分転換にもなるし健康にもよい。これからサイクリングで気分転換するには最高の季節を迎える。こうして気分転換を行っているうちに、季節にあわせて経済環境も好転することを期待しているのは私ひとりではないと確信している。ロンドンの底力に期待したいところである。